彼にはそれしかなかった。たった一つのその事に特化していたと言っても過言ではない。
だが、あまりにも強過ぎる個性と、才能は逆にひずみを生んだ。

「———それでも僕は……」

ギターを弾き続けるしか出来なかった。

終わりの時は近く、そして儚いものだった。
彼は突然の事件で命を奪われた。医療技術が進展した今でも、即死した人間を蘇らせる事など不可能だ。

彼は嘆く。
死に間際———即死にそんなものはないはずだが———に思ったのは、まだギターを弾いて居たいと云う夢。

消滅した暗闇の世界で、最後の時を見つける為に、彼は死ぬ事を避けて、死なない事を選択した。

どうしようもなく悲しい世界で。
どうしようもなく暗い世界で。
どうしようもなく……正しい世界で。
どうしようもなく生きようと彼は三回誓った。

夢と現実。
妄想の世界で、彼は今もギターを弾き続ける。

0

家に戻ると、そこには誰も居ない。……ま、後ろからついてきているブランシュは居るけどな。レイは駅の時点で別れた。家は結構近いんだけど……用事があるんだってさ。

それにしても、ブランシュからその事を聞いたらもぉ、本当にびっくりしたぜ。俺が拒否するとか、そんな思考なかったのかよ？

――あろう事か、ブランシュは自分の居た施設を出て、俺の家に居候するとか言いだしたのである。そう云うのは早い内から言っとけよ。吃驚するだろーが。

話せば長くなる、どうしてブランシュはその『施設』とか云う代物のところに居るのかと云うと……

……

まぁ単純な話、ブランシュは孤児だ。育児施設の――えーと、名前は何だっけなー。忘れた、けど結構覚えやすい名前だった。俺は忘れたけど。そんなところでお世話になっていて、当然、雪白って名字はその施設のブランシュの担当だったおねーさんの名字らしい。随分と優しい孤児施設のようで、楽しそうな、幼稚園みたいなところとはコイツ曰くだ。中学までそこから通っていたってのに、突然俺ん家と来た。

俺の両親は忙しい身で、常に世界中とか飛び回っている。実感がわかねーけど、結構有名な医者らしい。母親も助手として一緒に回っていて幼い時から俺は一人だった。最初こそは両親を呪ったけど、今は別にそうでもない。人を救う仕事だからな、仕方ない。

てなワケで、家は昔の診療所もかねている為にメチャクチャ広い上に、部屋も余りまくっている。三つぐらい余ってんじゃないかな。基本は全部俺がやりくりしている形で、料理も掃除も洗濯も、税金ライフラインエトセトラッ！　全部俺が払いに行く。両親は結構定期的に自分の病院に帰るから、その時に入金していくし、あまり苦にはならねー。欲しいものはある程度節約して買う事も出来るしな。ギターも小学の時にそうやって買った。

ちなみに家の内部構造は……まぁいまいちわかっちゃいないけど、玄関に入ってすぐの扉を開くとリビングがあって、扉の横の道を通っていくと、奥に行く廊下と階段。一階は基本昔やっていた診療所の名残で、広い部屋と、父さんの部屋、母さんの部屋――書斎とか、仕事場もある。もう、レントゲンの機械とか、全部無くなっちゃったけど、それでも充分過ぎるぐらいの施設がまだ残ってる。ベッドもあの病院独特の臭いがするしね。正直、毎年の維持費が掛かって仕方がないんだけどね。

んでもって、二階に行くと本当の住居スペース。リビングその二が存在していて、基本的にそこで料理とか食事をする。俺の部屋もこの二階の端に存在している。余っているのは三階にある三つの部屋なんだけど……大丈夫かな？　最近使ってなかったし、掃除しなきゃかなぁ。

そんな心配を抱えながら、二人で三階へ続く階段をのぼっていく。昔は三人で良く三階にあがってたよなぁ……

うげ、もう半分ぐらいから埃がたまり始めているな。掃除するたびに、毎回、ここもやらなきゃなー、とか思っているんだけど、なかなか手が出せないんだよな。そもそも、家が広過ぎる。一階と二階だけでくたびれるし、半日終わる。いやマジで、本気でやると基本そうなる。……当然のごとく、三階にたどり着いた時点では相当な事になっているのはわかり切っているのでありましてー。うわ、マジですげぇ。

状況としては、そこら中に大小様々な埃が落ちていて、匂いも何かそんなカンジ。何か、黒い物体Gが出てきても全くおかしくない状況だ。こんなとこ

ろにブランシュを置く事は、俺には出来ないよ！

……仕方ない。時間的にアレだけど、掃除、しますか？

「良い。おれがやる。居候になるからには……それぐらい、やる……」

そうかぁ？　それでもこのワンフロア、結構広いぜ？　荷物だって送ってもらうんだろ？

「それは土曜日の話。今日は月曜日」

だとしたらなおさらだろ。明日も学校あるんだぜ？　しかも授業が開始されるんだから、なおさらあんまり遅くまで掃除ばっかりやってると寝るの遅くなって、起きられなくなるぞ。俺、ブランシュを起こす自信はないなぁ。それに髪をセットする時間も考えろよ。

「大丈夫。アリスは、晩御飯の買い物……行ってきて」

う――――確かにこのまま買い物いかないと冷蔵庫の中空っぽだけどさぁ。……本当に一人で大丈夫か？

「問題ない。掃除ぐらい、おれにだって出来る。住むのはおれだ、住ませて貰うからには、それくらいはする」

その一点張り何だよなぁ、変なところでブランシュは頑固だから。

あー、もう、わかったよ。掃除道具は二階の物置――――場所、わかってるよな？　そこにあるから勝手に使ってくれ。ここまでくると流石に道具を使わないと無理だろう。

片手をあげて、俺は三階を後にして、再び一階に舞い戻る。ちなみに、一階から出ている俺だけど、外には二階の玄関に続く階段がある。それを使うのも手段の一つなんだけど、雨とか降ると滑るし、怖いから一階から入り始めたらそれがクセになっちゃって。今じゃ、一階以外の場所から外に出るのは珍しい。

がっしゃん。

家の鍵と、柵の鍵を開めると、夕焼けが俺を迎えてくれる。……ＳＰＣを展開して眺めると、五時を丁度過ぎた頃合。さぁて、早い内に買い物を済ませないと、料理が完成する頃には凄まじい時間になってそー。

がちゃがちゃと、物置の手前から自転車を取り出して、鍵を開けると、走りだす。ここから近くのスーパーまでは十五分ぐらい掛かる。さらに買い物だろー？　で、もういっちょ十五分掛けて家に戻ってくるもんだから、一時間ちょいの時間が掛かる。今から一時間ちょい、って事は、六時過ぎぐらいから飯を作るとなると――――やっぱり、少し軽めの、簡単に出来る時短ですよ。時短レシピ。

短い時間でー、しかも簡単でー、美味しいのは……やっぱり、炒め物ですよねー。麻婆豆腐ですよ、ニラレバですよ。

よっし、メニューけってーい。さ、急ぎますよー。

こぐ足に力を入れて、さらに走る。

……タイムセールで大変な目にあったぜ……まさかおばちゃんパワーに押しつぶされるとは……だけど俺の手には既にその先にあったものをつかんでいたんだぜ！　よしよし、これで勝つる！

時間と云うモノを犠牲にしたけど、今からなら充分六時半までには戻れるし、さ、早く戻ろう。

こきこき、と自転車をこぐと、十五分とも言わずに十分ぐらいでたどり着く事が出来た。六時半には、もう辺りはほぼ黒く染まっていた。

ブランシュどこまで掃除終わったかなー。ま、たかが一時間だし、多分自分の住むスペースを確保するだけで充分だろうけど。土曜日には、施設の方から荷物も運ばれてくるらしいし。

あ、ちゃんと父さんと母さんにも言っておかない

となぁ。無断は流石に拙い。多分大丈夫でしょうなぁ、父さんも母さんも、前ブランシュに会った時、部屋が空いているから住めばー、とか何とか言ってたしな。全く、お気楽なのか、それとも……。普通は部屋が余っているからってタダで住まわせる何てないぞ……。飯が終わって、洗い物してひと段落したらSPCにメール入れとくか。電話だと、忙しい時に迷惑だし。

　鍵を閉めて、家の物置の手前にもう一度入れ直す。あの場合、自転車で通学した方が良いよな。絶対に。自転車通学届け、出した方が良いかな。

　――――ん、でもまてよ。そうなると、背中にマッドくん（俺命名ギター）を背負って自転車に……やっぱり危ないよな、事故る。絶対に事故る。雨の日とかどうするんだよ。歩いた方が確実だっての。

　でも歩くとなぁ、この家から一時間掛かるんだよな。普通に考えて、七時半に学校に出ないと間に合わない。これじゃあ中学の時と変わらねぇな。中学は近くにあるってのに、どうしてまぁ、高校はあんな遠くに入ってしまったのか……いや、楽だからだけどね、しかも四年制で、色々と詰め込めるからって――それと、二年生からの専門分野も魅力だしな。

　玄関の鍵を開けて中に入って、靴を脱ぐと二階へ。真先にリビングの中にある冷蔵庫に食材を入れて――さて、料理する前に、ブランシュの様子でも確認してくっか。差し入れのスポドリもあるワケだし。

「おーい、ブランシュ、どこまで進んだぁーーーーって、のわぁっ！」

　そこには、埃一つ落ちていない綺麗な廊下が存在していた。うひゅー、見違えたな。

「……随分と……進んだ。今日はこれで終わり。寝る場所は確保したし、残りの部屋を掃除するのは、また明日」

「そ、そうか……それは助かる」

　コイツ、掃除得意だなぁ、こんな短時間でここまで……

「それと、Gは殺虫剤で殺した」

「やっぱし居たかッ！」

　よく三階まであがってこれるよな、さすがにそこまで行くと感心するぜ。

「ゴキブリは、生命力の強い虫。人間が滅んでも……ゴキブリだけは生き残ると言われている」

　ほほぉ、そいつはすげぇ。あんなに気持ちの悪い形態をしているクセに生命力は無駄にあると云うワケですな。うざったい。

　んで、処理したGさんはどうしたんですか？

「アリスの足元にある袋の中。多分、まだ――」

　――ガサッ！　ガサ、ガサガサガサッ！

「んぬぉぉぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！　こいつらしつけぇな！」

「うごめいてる。まぁ、その内殺虫剤の効果が回って死ぬけどね」

　そんなもん放置しとくなよ！　あー、燃えるごみの日って、明日だよなァ。今日は紙ごみだぞ。それまでこいつらこのままか？

「だから、その内に殺虫剤の薬品が回って……死ぬ」

　なら良いんだけどよ。

「そんなグロテスクな話のあとに悪いんだけど……メシ作るけどブランシュ、どうする？　ゲームでもしてるか？」

　俺の部屋にはPS4あるけど――あ、5はまだ買えないから我慢して。

「良い。手伝う」

　そりゃ助かる。

　……メシが終わったら役割分担とか決めないとだよな、これから一緒に暮らすワケだし。掃除当番とかゴミ出し当番とか、メシ当番とか。――じゃんけんとかはいいぞ、オマエとじゃんけんすると負け

るの俺だから。公平に決めよう、公平に。
本当の話、ブランシュと過ごして早数十年。幼稚園時代から続く腐れ縁の中、ブランシュだけにはじゃんけんで勝った事は一度もない。何でも、じゃんけんにはコツがあるとか何とかで、必勝法は教えてくれないけど、誰かコイツの運に勝ってくれよまったく。おかげでじゃんけんじゃ物事を決める事が出来ないし。
「なら、飯の後に『アルティメット・ヒッツ』で勝負を決めよう……」
お、なるー。格闘ゲームだったら互角だしな、うんそうしよう。アルヒで俺に挑んでくるとは……さすが、わかってるぜ。
――ちなみに、アルティメット・ヒッツ（略してアルヒ）は、C●PCOMが作った格ゲーで、なんだかよくわからない、いわゆる萌え系格ゲーらしい。けどまぁ、操作性とか、色々と格ゲーに順守しているみたいでその手の人間には人気のあるゲームになっているらしい。ちなみに俺は今のところ、PS5で出ている新作を除いて全部持ってるぜ！　PSPバージョンも、Wii3バージョンも、今のところ全部持ってるけど、シナリオ的にも、機能的にも今のところ、PS4で出たヤツがダントツだな。うん。
久しぶりにゲーセンでアーケードしに行きたくなったなー、今回のPS5の移植元の『Alternative Action』今回の追加キャラもまた凄い加減らしいけどね。
さてと、じゃあメシ、作るとしますか。
三階から二階におりて、ブランシュはさっきまで掃除してたワケだから、手を洗いに行って、俺は一足先に台所に行こうとしたところで――
ぴんぽーん。
こんな時間にインターフォン？　一体誰だぁ？
SPCを展開して、外のカメラと連結させると、そこには、うわ、不良が居る！
『てめ、今不良が来たとか思っただろ！』
しかも心を読まれている！　エスパーだ！
『いいから開けろッての！』
仕方ない、開けてやるか。俺はため息を吐きながら玄関の扉（二階）を開けてやる。二階から入ってくるヤツなんてオマエぐらいだけどね。レイ。
「シバクぞこのヤロウ」
「おーこわ。やっぱり不良だ」
それよりも、一体どうしたんだよ、こんな時間帯に来るなんてさ。
「なんでって……いや、ブランシュがオマエの家に居候するって言うからさ、差し入れだよ、差し入れ。ほれ――」
コンビニの袋の中にはお菓子の山々。おお、ありがたい。他にも食材やら、インスタントの代物やらが詰まっていて本当にありがたい。
何か貰ってばっかじゃ気分悪いなぁ。じゃあレイ、今日晩飯食って行けよ。
「ん、じゃあ、そうする」
「おや素直」
「……今日の晩飯当番が兄貴だから食いたくないだけだよ。あの筋肉バカ、何でも肉入れりゃ良いってもんじゃねーぞ」
「そ、そうかぁ。あのおにーさんの料理かー」
油ギトギトのアレはなかったわなぁ。でももう片っ方のおにーさんは料理上手いじゃん。そっちに作ってもらえば良いのに。
「アレはヒキコモリだからな。それでいて勉強と料理とか、インドアな事は得意だから問題もんだ」
おにーさんにそこまで酷評しちゃっても良いんですかいぃ？　一応おにーさんですよ、年上ですよ、尊敬の言葉なんて物はないんですか！？
「ない」
はっきり言ったな。すぱっと言ったな。可哀そう

におにーさん方々。――確か今大学生だったなぁ、この前会った時には、大学生だよー、とか言ってたし、なら今年も大学生だろう、うん。

ま、じゃあ三人分の食事を作るとしますか。ブランシュは手伝うとか言ってくれたけど、レイ、オマエは食べる専門だろ？　じゃあテレビでも見てろ。

少し不満そうな顔をしたけど、その辺わかっているみたいだな、無言でリビングに設置されているテレビの電源を勝手に入れてチャンネルを合わせ始める。……よしよし、良い子だよ、レイたん。よし、ブランシュ！　始めようぜ。

◇

バンド部、かぁ。僕はベッドの上で横になって色々と考える。まさかこんな事になっちゃうなんて思っても見なかったよ。一日が凄く長かった。たかが、本当に入学式だけだったはずなのに、少女漫画研究部は実は潰れていて、別の場所に入ろうと思ってた文芸部も潰れて――うーん、頭の中で収集つけようと思うと逆にこんがらがっちゃう。にゃぅぅぅぅぅぅ。

枕に顔をうずめて、ようやく冷静さを取り戻す。とにかく、今考えているのは、勢いで入るとか言っちゃったけど、バンド部なんて、出来るワケないって事！

楽器なんて使えないし、そもそも、マネージャーなんて何をすればいいのかわからないし……どうしよう。今さら断る事も出来ないし――夢崎、くん、でしたっけ？　あの人にも悪いです。あんなに喜んでいたのに……ガッカリする姿を思い浮かべるだけで、嫌だなぁ。

ね、ネガティブに考えるからダメなんだ。ここでポジティブに考えてみよう。

そうすると、やっぱり今の性格を何とか出来るかな。引っ込んじゃって、いつも一歩踏み出せないこの性格を直せるかな？　バンド部だもん、ステージとかで色々とするんだよね。マネージャーでも、色々とステージのセットとかで人と向き合うと思うし。

う、うん！　大丈夫だよ。そうすれば多分、僕のこの嫌な性格も戻せるよ！　同じ悩みに悩む人も視つけたし……ネムさん、でしたよね。

いよっし、こんな時には少女漫画を読むに限ります！　勢いよくベッドの上から降りた僕は、少女漫画に手を掛ける。

「またその本かよ」

「うわわっ！」

いつの間にか部屋の扉のところに、ユカが立っていた！　いつの間に家に来たの！？

「いや、食事を貰いに……」

はぁ――。ため息を吐いて、本を元の位置に戻す。つまり、もう夕食ってワケなんですね。

ユカは両親が離婚していて、お母さんと二人暮らし。アルバイトで一応ユカ自身もお金を稼いでいるんだけど……料理は苦手だし、お母さんも忙しいから、こうして僕の家にちょくちょく来て食事をしていく。家のお父さんとお母さんは全然気にしていない様子――と、言うかもう、歓迎していると言いますか。

それと、またその本か……と言われたのは……

「オマエ、それ見るの何度目だよ。毎日視てんじゃねーの？」

「あ、そうかも。新しい漫画を買っても、それを読んだ後はこれ視るから……」

「良く飽きないな――」

何を言っているんですか！　これは名作ですよ！　この主人公の男の子は、国会議員の息子で、不良なんです！　喧嘩に明け暮れる彼を救うのは、学校に居る一人の保健室の女性さんなんですから！　職業の壁と、そして年齢の壁を越えて一緒になる最後――本当に名作です！　聖書です。僕の中の最高傑

作と言っても過言じゃありません！　もっと評価されるべきだと思います！

語りつくす事三十秒。今日は随分とまとめられた方だと思うな。いつもなら、もっと長く語っていて、ストップさせられるんですけど、今日はありませんでしたから相当早いです。三十秒。

じゃあ、晩御飯食べますか。

「……毎回ながらオマエのその少女漫画を語る時のテンションをもっと別の場所に持っていく事が出来れば良かったのにな……」

頭を掻きながら失礼な事を呟く。む……そう言われても、出来ないものは仕方がありません。それを治す為に部活に入ったんですから！　明日からがんばります。――まぁ、一時的でしょうし、二週間後にはまた別の部活に入ると思いますけど。

発言に首を傾げるユカ。

「アレ？　少女漫画研究部じゃなかったのか？」

ああ、そうでした、ユカには説明をしていませんでしたね。

――実は、少女漫画研究部も、文芸部もダメになっちゃったんです――と、一応の経緯を交えて、説明をする。

説明は簡単だったから、さっきの少女漫画の語りよりはちょっと長くなったけど、一分弱で終わる。勿論、解説とかもちょっと交えて。

「ははぁ、理解したような理解しなかったような。で、オマエは結局そのバンド部とやらに入るのか？」

言われて少し悩む。……確かに、入るとは言いましたけど、正直僕にバンド部なんて無理です。さっきまではポジティブに考えてましたけど……多分、新入生歓迎会のライブで終わっちゃうと思います。抜けて、それからは部活に入らずにそのままかと……

ふぅん、と納得したような頷きと唸りを見せたユカは階段をおりてから振り返る。

「ま、いーんじゃねーの。無理に変わる必要はねーよ、オマエ」

うん――。

内心では頷いて、嬉しかったけど――ここまで言って、無理だとか何とか言ったけど、やっぱり、やっぱり……優柔不断な自分の態度が情けないです。ダメなら最初から、ノゾミくんみたいに無理です、と言えば良かったのに、出来なかった。

……そうか、要するに僕は、誰にも嫌な気分になってもらいたくないんだな。――そうか、そうなのかも知れない。と、自己確定。

以上考えてももっとネガティブの深みにはまるだけです、やめよう。心は沈んだままだけど、まだマシな方だよ。

様々な深い何かを抱えて、僕はようやく、椅子に座って、夕食を目の前にする事が出来た。随分と長かったなぁ。

今日の夕食のメニューは……えと、何ですか、コレ。

「今日はねー、失敗したのー」

……え？　それってつまり、そもそも何を作ろうと思ってこうなったんですか、お母さん。

「ピザ」

ピザ！？　ピザってこんな色になるんですか！？　そもそも丸くもないし、四角くもない。３Ｄで表現した奇怪なオブジェに視えますよ！

恐る恐る、匂いを嗅いでみる。う、一応ピザのような匂いがするような、しないような。この上に乗ってる緑の物体は、多分、ピーマン（のつもり）なんだと思いますけど、この白い液体は何ですか……？

「ケフィアよ！　体に良いって聞いたから掛けてみたのー」

「あっはははは、流石母さん。チャレンジ精神旺盛だなァ」

おほほー、じゃないですよ！　これ、味見した？　食べられるの？　視た目だけ視ると確実に食べられ

ないって、書いてあるけど……って、これ、チーズじゃないよね！？　絶対に！　黄色いけど、これ何！？

持ち上げてみると、伸びない。落ちる。コーンじゃないだろうかと思ったけど、コーンはこんなじゃない。ぽたぽたと落ちてるし……これも液体のような気がするんだけど。

食えるの？　これ。失敗って言った事は、食えないんじゃないんでしょうか……

「大丈夫！　多分……」

多分！　多分って言ったこの人！　ちょっと、息子にそんな食べ物を出さないでくださいよ！　晩飯にならないじゃないですか！　それよりも他におかず無いんですか！？　ピザでご飯を食べようとか、そんなの、欧米でもしませんよ……

第一、家にこんな巨大なピザを作るオーブントースター……ありましたっけ？　不思議に思って辺りを見渡すと、それらしき代物は存在していない。じゃあ、本当にどうやって作ったんだろう？

椅子から腰をあげてニコニコと笑っているお母さんの後ろを抜けて、台所に行くと……煙を放って、故障している電子レンジとオーブントースターがあった。あっちゃー。

額に手を当てて、眺めていると、後ろからひょいっと、ユカが顔を出してこりゃひでぇ、と感想を述べる。そんなもっともな感想、述べないでください。本当に酷いです。

大方予想はつくけど、もしかして、二つをこう、改造して作ったの？　途中でどちらもオーバーロードして、どっかん！　かな。どうして僕は気づかなかったんだろう、同じ屋根の下に居たのに。

「サイレンサーをつけていたもの！」

さ、さいれんさー？

「銃に装着する音を小さくする装置だよ。……ま、普通に考えて電子レンジとか、オーブントースターにつけるサイレンサーは存在していないな」

本当に僕はベッドの上で考え事をしていて、それで聞こえなかったと言うのならバカ過ぎます。どうして気づけなかったのか、止められなかったのか。うう。

慰めるようにユカが背中をぽん、と一つ叩いて、立ちあがる。

「僕が作るよ」

「あら、助かるわー」

……もしかして、その為にわざと失敗したとかないよね？

◇

はぁあああ、腹いっぱい！　食った食った……っ！

飯を食べ終わった俺たち三人は、しばらくテレビを視つつ、他愛のない話を続けていたのであるが――そろそろ、始めるか、ブランシュ？

問い掛けると、コクリと頷く。洗い物を先にやる前に、この丁度良い状況下でやるのが一番良いプレイングが出来るんだぜ！　俺の実力、視せてやんよ。

急いで部屋からＰＳ４を持ってきて、設置する。どうせ中身のデータは最初からアルヒが入っているんだからさ、このままスイッチオン、で起動する。

一昔前から、プレステシリーズはディスクシステムをほぼ撤廃。ディスクは最初のインストールだけで、あとは皆プレステ自身の中にインストールしたデータで動くようになっている。中には容量を削減する為に、ディスクの一部を載せて、残りはディスク自体を入れて動かすハーフインストールなんてのもあるけど……この俺のＰＳ４には、当然アルヒがフルインストールされているのだよ。

ちなみに、ディスク付きでやると随分とロードに時間が掛かるけど、こうやって、フルインストールしておけば少ない時間でロード出来るのだよ！　ＯＫ、よし、起動したぜ。

事情を知ったレイは、くだらねー、とテーブルに肘をつきながらテレビ画面を眺める。くだらないものか、何せこれからの分担が決まるんだからな。真剣勝負だぜ。

ＶＳ２Ｐモードを選択。キャラクター選択画面に変更。……何せ相当数のキャラクターが居るからな、表示の仕方も、左側にキャラの名前が出て、右側にビジュアルが出る仕組み。

俺の使い手は……『淀橋ミキ』だぜ！

（わからない人への解説。いや、そもそも誰もわからないけど……

淀橋ミキ。**MIKI Yodobashi**

年齢十六歳の女の子キャラクター。マッドサイエンティストで、無限兵装の使い手でもある。使用武器は白衣で、白衣の中から別次元空間を作り出し、武器を展開する、どちらかと云うと遠距離キャラ。

メリットとしては、その俊敏さと、武器展開による一斉掃射。

逆にデメリットは、武器展開が遅い。しかも武器展開中は無防備で、攻撃が当った瞬間のキャンセルが必要な事から、初心者にはお勧め出来ないキャンセラーキャラになっている。

性格はおしとやか。しかし、平気な顔をして改造やらなんやら言う問題児。

紹介分は「初めまして、ご主人さま。早速ですが改造しましょう！」）

対するブランシュは……お、いつも通りの『紫電シオン』か。

（わからない人への解説。

紫電シオン。**SION Shiden**

年齢十八歳の女の子キャラクター。無口の刀少女で、合計三つの刀。オーバードライブ中は四刀流にもなる、「非斬・抵抗流」の継承者。中・近距離キャラ。

メリットとしては、刀による最大三回のコマンド要らずのコンボが可能。その後にさらに攻撃を繋げられるラッシュ型。

逆にデメリットはコンボが繋がるが、最大三回以上行くには相当の鍛錬と反射神経が必要であり、コマンドがなかなかに難しいキャラではある。

性格は無口で感情を表に出さない。しかしご主人さまに対する忠誠はピカイチ。

紹介分は「初めまして、ご主人さま。わが刀に掛けてその名、守って差し上げましょう」）

以上が俺とブランシュの使い手キャラ。さて、どちらが勝つかわからない。一応、俺たちの戦績はイーブンだし、勝ち越し、イーブン、負け、イーブン――繰り返す事何回かなんて、もう忘れたっての。

よっしゃ！　じゃあ、始めるとしますか！　ＳＴＡＲＴボタンをぽちっと押すと、バトルが始まる。

バトルシステムは、時代に似合わず２Ｄ風格闘ゲーム。グラフィックも３Ｄではなくて、２Ｄ風になっている。ラウンド制をとっているのは昔から変わらず、二回先に勝利を取った方がマッチ戦を制する。――そこに、俺たちの独自ルール。マッチで勝利した人間が、カレンダーの好きな場所に丸をつけると、そこは相手が当番をする場所ってワケ。

全勝しても、最低一週間に一度は何かを当番しなきゃいけないと云う特典付き。これで負けてしまった方にもチャンスと云うか、救いがあるのですよ。

他に追加するルールとしては、負けた方はキャラクターチェンジを可能のシステムを搭載してある。負けても、次に使っているキャラクターの弱点を突いたキャラを出せば勝率も上がるし。例えば遠距離に負けたら、同じ遠距離を持ってきて、長期戦に持ち込む事が出来るし――そんな感じで、俺とブランシュのアルヒによる当番を決める、仁義なき戦いが（観客一名）始まったワケだ！

バトルステージは基本後ろ側のビジュアルが変化しているだけで2Dの、ギミックの存在しない物だ。ギミックによって勝利する格闘ゲームなんて、ギミックゲーになっちゃうだけだしね、やっぱりスタンダードなのが一番良いよ。

レディの文字が現れて、ゴー。……コントローラー操作が解禁された刹那に、俺とブランシュの指は動き始める。視よッ、この高速の指さばきをッ！　これこそ長年ゲームをし続け、長年SPCのパネルを押し続け、長年コントローラーに慣れ親しんだ人間にのみ与えられる力ッ！　素人には真似出来まい！

――そんな俺の自信の指さばきは、目の前の二次元画面に映っている画像のキャラを動かす。指の動きに反応して、縦横無尽に2D画面を巡り、攻撃を繰り出し、白衣を翻し……ここでキャンセルが出来ないのも難しいところだよなァ。もっと相手に隙を作ってから攻撃しないとな。

一方のブランシュの動きもいつもよりキレてるぜ。動きが俊敏だ。元々ラッシュ型のキャラだしな、シオンは。なら、あとはアイツの腕次第でどこまでも速く、正確にその刃を振るえる。

そしてそれは俺も同じ事ぉ！　そっちとこっちの腕が同じだと云うのは既に語ったわぁ！

ムダムダムダムダムダムダムダ――――――――ッ！

コントローラーを左手と足で固定して、利き手の右手の親指で○ボタンを連打する。コンボよ繋がれェ、白衣から湧き出る攻撃は連打によって決まる技もある！

逃げるブランシュ、流石だな……この動きは畜生、既にわかっているって表情と動きだな――ま、基本ブランシュの表情って変わんねぇんだけどな。俺たち三人だからこそわかる微妙な顔の変化を、捉えているワケだ。

勘が告げている、ここで相手は仕掛けて来ると！

俺の腐りつくしたゲーム脳が告げてるぜ！

「じゃあゲームヤメロよ！　わかってんじゃねーかよッ！」

そんなツッコミ認めましぇーーーんっ。俺の頭のパトスは、もう今はゲームにしか向かって居ない！　そう、それは、まるでゲームをする為だけに産まれて来た存在のように、コントローラーと手がフィットしているんだ。

――そんな俺のゲーム脳の言っている言葉は確かに合っていたようだぜ。案の定、ブランシュの攻撃が徐々に始まって来た。

隙を作るつもりの俺の戦法が、いつの間にかブランシュの戦法に切り替わっている。こっちは言った通り、白衣を使っての遠距離攻撃が主なキャラだから、中・近距離線のアイツは確実に不利なハズなんだけど……上手い事、中距離専用の一撃をこちら側にけん制しつつ懐に潜り込んで来ているんだ。

うっひょお、さすがはブランシュだぜ……俺の永遠のライバルだ。だがしかし！　勉強で負けている以上、ゲームでブランシュに負け越す訳にはいかないんっ、だーーーーーーッ！

ぐりぐりぐり、と動かす指の動きを更に速める。もう、俺の鎖は解き放たれた！　これ以上俺の指は動かねぇ……文字通り最大出力の指の動きだぜ！

だけど――ブランシュの思っている戦略とは違う――ハズ。

なんせ俺の目的は……

「――っ！」

……そう！　遠距離戦のキャラだと云うのに、接近戦を仕掛けるところにあるんだからな！　俺の戦法は、白衣からの一斉掃射をして、ジャンプ、キャンセルをして一気に前に出て白衣の攻撃を再開して連打する……まさに考えられないリスクの高い攻撃だったんだからな！

食らいやがれ！　驚いているブランシュの顔に一斉掃射ァ！

どがががが、どががん、どがん、どがどが！

モニターに現れる『YOU　WIN！』と『YOU　LOSE』の文字。

うし！　じゃあ日曜日はブランシュね。日曜日ぐらいゆっくりしたいし、ジャンプもゆっくり視直す時間が欲しいから！　――とまぁ、こんな感覚で決めて行きますけど、OK？

「……了解」

おぅ？　全くへこたれていない様子ですなぁ。

「当然。次……勝つ」

その意気やよし！　かかってこいやァ！

「……このテンションをもっと別のところに持って行けりゃ良いのにな……」

後ろでレイが失礼極まりない台詞を放った。

全ての決着が着くのに、四十分程度を費やした……つ、疲れたぁ。まさかここまで白熱するとは思っても視なかったぜ……

でも結局、最後のど真ん中水曜日はわからず仕舞いか。今のところは――

日、ブランシュ

月、ブランシュ

火、オレ

木、ブランシュ

金、オレ

土、オレ

――とまぁこんな感じで良い具合にフィフティフィフティ。最後の水曜日バトルによって、どっちが損して、どっちが得をするのか決まるワケだ。

たかが一日！　されど一日！　この一日を有意義に過ごせるかどうか、いざ！　尋常に……っ。

「いや面倒くせぇし。オレがやるよ」

……はぃ！？

ちょ、おま、レイぃぃぃぃぃぃぃっ！　今のはKYでしょうKY！　これから盛り上がるところを突然水差しやがってェ！

「じゃあやらねぇよ」

「すみません、調子乗ってましたやってください。

――つかどうしてレイがやるんだよ」

「いや……何かお前たちばっかじゃ心配だからよ、オレもここに居候になろうかと思って……」

なぁにを言いだすやら。

家は宿じゃねーんだよ！　それに家あるんだから家に帰れ！　ブランシュは仕方ないから家に泊めてるし、よしみもあるし、親友だからな！　だがレイ、お前は駄目だ！

「……」

ブランシュも悲しげな顔だぞ！

「いつからお前はブランシュの通訳になった」

「今先方」

そう言うと、まぁいいか、とか呟いて――何が良いんだか――

「わかったよ。オレは帰るよ」

「待てよ！」

「……？」

「……水曜日は来いよ！」

親指をあげて、俺はレイに言う。

◇

ちなみに食事は本当に僕が作った訳で……はぁ。

「助かったわぁ！　さすがは私の息子！」

ぐりぐりと頭をなでるお母さん、痛い……痛いよ……うう。

ちなみに今日のメニューは冷蔵庫の中にまともなものが入っていなかったから、仕方なく、お肉を包

丁できざんで、ミンチ状にしてからハンバーグみたいにして食卓に出した。

――で、今はその片づけの最中。テレビ番組を視ながら、台所でお皿とか色々と洗っている最中。はぁ、これも僕がやる仕事なのかぁ……出来れば、食べた当人たちにやって貰いたいな、これ。だけど本当に家のお父さんもお母さんも……はぁ、どうしてかなぁ……

「いやぁ、リンが居て助かったなぁ」

そしてユカは何馴染んでいるのかなぁ、ま、いつもの事だけど……ちょっとは手伝ってよ。お皿拭くだけでも良いからさぁ。

「イヤ」

即答だし！　うー、本当にどうして、こう……

と、二度目のため息を吐いてもどうしようもない事を僕は知っているよ。もう諦めて全部自分でやる事を決意したら、意外にも、僕の作業は早かったっす。だらだらやるより一気にやった方が良いよね。

……かちゃん。

ふぅ、ようやく終わった……えーと、もう八時かぁ、嫌に時間が掛かったな。特にお母さんが作ったあの変な物体をどう処理したものかを悩んでて一番時間が掛かったかも知れません。あれは生ごみに出すべきか、それとも燃えるごみに出すべきか……危険物に出すべきか、悩んじゃいました。

ちなみに、結果として生ごみに入れたワケだけど――なんか、嫌な、雰囲気と云うか、オーラを放っているっす。一刻も早く明日が来てゴミ捨て場に持って行きたい気持ちでいっぱいっす。

手を洗って、二階の部屋に戻ると、ユカが僕のベッドの上で漫画を読みながら待っていて、入ると、よっ！　とか言いながら手をあげる。……その仕草に、ちょっとの怒りを覚えながらも、僕は我慢して床に座る。

「ご苦労さん」

「そう思うんだったら手伝ってくれれば良いのに……」

「めんどーだっつーの。そう云うのはお前の仕事だろーが」

僕は姑でもなければ、両親の面倒見役じゃないんだけど……なぁ。

「いやもうここまで来れば完璧な保護者逆転だっての」

そうしたのは僕じゃなくて、てか僕のせいじゃなくて、僕の両親だと言いたいんだけど、言っても結果現在の状況に変わりはないと判断した僕の思考は間違っていないよね？

……さて、じゃあそんな話はそのままにして……明日の準備でもしようかな。明日は確か学校生活の説明だよね、今日やるはずだったものが明日になったって言ってたヤツだよね。つまり、今日配られた資料を一通り持って行けば大丈夫かな。

あと、一番重要なのはＳＰＣのアラーム機能をもうちょっと音量をあげる事なんだけどね。よし、あげておこう。

「また今日みたいに遅刻したら拙いもんな。さすがに明日はどうしようもねーぞ」

う。その辺突かれると痛い。まさか電車の中で寝ちゃうなんて誰が思うのか。……もう僕の責任で良いですよ、てか僕の責任ですよ。今日はだから早めに寝ておきますよ。

「そうしろ。

――じゃ、俺はこの辺で帰るわな。晩飯ごっそさん」

「うん。気をつけてな」

「わーってるっての」

がたん、と音を立てて部屋の扉が閉まると階段を降りて行くユカの足音が響く。いつも通りの音だ、これからユカはアルバイトなのかな？　学校が始まったから夜のアルバイトが増えるとか何とか言ってたけど――本当に、ご苦労だな。

――ユカは両親が離婚して、今はお母さんと二

人暮らし。学校に行く事さえも厳しいのに、何とか学校に通いながらもアルバイトをして生計を立てている。……中学校の時も頻繁にお昼に学校を早退したりして、アルバイトに出てたみたい。高校に入った今年からもそうすると――――思う。

今の時代、高校までは義務教育。随分昔は、中学校までが義務教育だったらしいけど、特区の法令で義務教育は高校生まで。……学費は免除されてるけど、やっぱり教科書代とか、家での生活の資金とは決して良くはない。だからこうして働く――――って、ユカは言ってたっけ……

僕と同い年なのに、どうしてここまで違うのか、偶に首を捻るし、自分を情けなくも思う。凄いっす、ユカは。

ちなみに、僕もアルバイトはしたいんだけど。欲しい少女漫画の数も増えて来て資金は幾らあっても少なくはないんだけど……今の僕の性格もあるよりも、何よりも、お父さんとお母さん（特にお母さん）が反対しているワケでありまして。うう、僕がユカのように一歩踏み出せるようになるのはいつになるんだろう。

その一歩が、バンド部の（仮）入部だと思いたいなぁ。